

厚生労働科学研究費補助金  
(政策科学総合研究事業(統計情報総合研究事業))  
分担研究報告書 R6 年度

ICD-11 の適用を通じて我が国の死因・疾病統計の向上を目指すための研究  
「課題のある死因(老衰、心不全、外因死等)の ICD-11 枠組での適切な把握手法の提案」

研究分担者 木下 博之 科学警察研究所 所長

研究要旨

課題のある死因(老衰、心不全、外因死等)について、老衰については、昨年度の検討事項をふまえ、研究班で作成したインタビューガイドに基づき、実際に死亡診断書・死体検案書を作成する機会の多い医師に直面・オンラインにてインタビューを実施し、その結果を取りまとめている。

外因死に関しては、低体温の事例で薬物が影響したと考えられる事例について検討し、さらに熱中症の誘因としての薬物の関与と、複数の薬物の関与した例についても予備的検討をすすめた。

これらの結果をふまえ、ICD-11 の枠組みを用いた適切な把握についてさらに検討をすすめていく。

A. 研究目的

近年の医療の進歩と生活環境の改善により、先進国での人口の高齢化が著しい。わが国は世界的にもこれまで経験のない超高齢化社会に突入しており、その影響は様々な社会指標にも反映されつつある。わが国の死因統計における「老衰」の増加は近年特に顕著であり、現在では年間 10 万人を越え、主な死亡原因の第 3 位となり、大きな割合を占めている。その急激な増加は今後の保健政策を考える上でも無視できない要因であり、それらを適切に把握していくことが重要であるが、「老衰」については医学教育の中で触れられることは少なく、また「老衰」自体の定義の曖昧さや、複合的要因の関与も関連している。そこで、「老衰」の実情について検討するとともに、法医病理学的立場での「老衰」の定義についても

検討する。

また、外因死に関しては、剖検例のうち、主たる死因に影響を与える要因として、昨年度から予備的検討を行った薬物の影響についてさらに調査する。

B. 研究方法

老衰に関しては、昨年度から班会議で検討し、作成したインタビューガイドを用いて、実際に死亡診断を行っている医師にインタビューを実施した。

外因死の事例に関しては、剖検事例の中で主たる死因に影響を与えた因子の検討を進めた。昨年度から検討を開始した薬物の影響した事例について、低温曝露による事例の検討を行った。2020 年から 2023 年に香川大学医学部で実施した法医解剖例 415 例のうち、死因が凍死あるいは低体温症と

判断した 21 例について検討した。

#### (倫理面への配慮)

データの収集に関しては、個人情報や個人が特定できるような内容を含まない。また、外因死事例の調査に関して、香川大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した。

### C. 研究結果

老衰については、作成したインタビューガイドに基づいて、4名の医師にインタビューを実施した。内容については現在データ整理を行っているが、判断する根拠についての生の意見を聞くことができ、興味深い。

外因死の事例に関しては、調査した 21 例の内訳は男性 8 例、女性 13 例(平均年齢: 77.3 歳)、このうち 12 例で薬物(ベンゾジアゼピン類、抗精神病薬、抗ヒスタミン薬など)を検出した。エタノールの検出は 1 例のみで、低濃度であり影響は少ないものと考えた。

薬物の影響については、その関与の度合いについて、より客観的な指標が求められる。

### D. 考察

インタビューの実施により、臨床医のみならず法医学者の考えもふまえ、「老衰」について、定義(案)も含めた一つのアウトラインが示されるのではないかと期待される。

外因死に関しては、今回の検討で、寒冷・低体温の事例において、薬物が死因に与える影響として、死亡に至るリスクとなる事例が示された。これらを統計の上でどのように評価していくかが課題である。

### E. 結論

今後、「老衰」自体の定義の曖昧さや、複合的要因の関与について、臨床医のみならず法医学者の考え方もとり上げた上で、どのように考えていくべきか模索している。

外因死に関しては、昨年検討した溺死だけでなく、高温や低温など様々な環境要因の関与する事例についてもさらに検討を進める必要がある。

### G. 研究発表

#### 1. 論文発表

1. Takei S, Kinoshita H, Jamal M, Yamashita T, Tanaka E, Kawahara S, Murase T. An autopsy case of heatstroke under the influence of anticholinergic drugs. *Albanian Journal of Medical and Health Sciences*. 2024; 64:1-5.

2. Takei S, Kinoshita H, Jamal M, Yamashita T, Tanaka E, Kawahara S, Abe H, Tsutsui K, Murase T. An autopsy case of intoxication caused by drug interaction with multiple psychotropic drugs, fluvoxamine, levomepromazine and trihexyphenidyl. *Legal Medicine*. 2024; 70: 102482.

#### 2. 学会発表

1. 竹居セラ, 安部寛子, 山下忠義, 田中悦子, 川原佐知子, モストファ ジャーマル, 森枝 晋, 木下博之. 低体温・凍死事例への薬物およびアルコールの影響. 第 108 次日本法医学会学術全国集会. 岡山, 6/5-7.

2. 竹居セラ, 安部寛子, モストファ ジャーマル, 田中悦子, 川原佐知子, 木下博之, 村瀬壮彦. 薬物による発汗抑制が熱中症の誘因と考えられた 2 事例. 第 7 回日本法医学病理学会学術全国集会. 京都, 9/20-21.

3. 木下博之. アルコールの影響評価とその

課題. 第 61 回日本犯罪学会学術集会. 東京, 11/30.

3. 関連した実務活動

日本医師会 死体検案研修会(上級) 講師

H. 知的財産権の出願・登録状況  
(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし